

あとがき

創基 150 年史編纂部会委員長
柴田正良

金沢大学創基 150 年の記念事業の一環として 150 年史の編纂刊行を中村信一学長から命ぜられたとき、すでに本学には、創立 50 周年記念事業の際に編まれた『金沢大学五十年史通史編』、『金沢大学五十年史部局編』という詳細にして大部の書物とともに、『金沢大学 写真で見る 50 年』という歴史写真集とでも言うべきものもあることがすぐに念頭に浮かびました。それらの先達があるにもかかわらず、今新たに編纂されるこの 150 年史の独自の存在意義はどこにあるのだろうか？

しかしその難題は、ある意味であっけなく解かれました。器のかたちが水のかたちを決めるように、150 年史のコンセプトは外見と用途からあっさり決められたのです。重厚長大と軽佻浮薄の中程を歩き、研究者向けの巨大な書物と観光者向けのガイドの間を目指すこと、海外にまで持ち込むのに苦痛でない大きさと重さで、しかも長い歴史に刻まれた数々のエピソードを満載したもの。そして、まさしく金沢大学の校風とは昔からこれであり、金沢大学生とは今もこういう気質である、といった真実をできるだけ平易な文章とビジュアルな構成で読者に伝えること、これが直ちに私たちの 150 年史の目標になりました。

このコンセプトを実現してくれたのが、フィレンツェの壁画修復で名高い本学の宮下孝晴教授と二人の教育学部(美術)の卒業生からなるデザインチームです。出来上がった『150 年史』を手にとってみて下さい。表紙や紙面をときに力強く、ときに奔放に貫いている筆のストロークは、途切れない時間の流れを象徴しています。またみなさんは、そこここに、本学の校章ともなっているアカンサス(ハアザミ)の花を発見することでしょう。さらには、表紙の風合いに、この地方独特の漆や金箔の印象を見て取るに違いありません。私たち編纂部会は、こうしたデザインにくるまれた 150 年史をみなさまにお届けすることに、大きな喜びを感じています。

さて、あれから時はめぐり、いまが創基 150 年目となりました。それは大きな季節の変わり目のように、私たちが快い緊張感で満たします。これから先、希望の未来を掴もうとするたびに、眠りからの目覚めのようなこの感覚を私たちは味わい続けることでしょう。かつて一人の詩人が何かのときに感じたように…

四月は残酷極まる月だ

死んだ土からライラックを育て上げ

記憶と欲望をないませ

鈍重な根を春雨で刺激する

(T. S. エリオット『荒地』から)